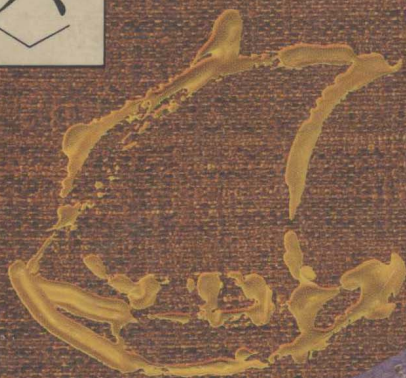


司馬遼太郎

菜の花の沖
六



司馬遼太郎

の花の沖六



菜

菜の花の沖六

昭和五十七年十一月二十五日 第一刷

定価 千二百円

著者 司馬遼太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話 東京 二六五―二二二一

印刷 大日本印刷
製本 大工製本

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目 次

遭 遇 7

北 へ 84

カムチャツカ 111

冬 営 141

無 明 193

流水の海へ 223

泊村の海 236

日本陣屋
257

展開
303

箱館好日
324

晚霞
343

あとがき
350

題字 装幀

中田 栗屋

功 充

菜の花の沖
六

遭 遇

リコルド少佐は、不期の戦いも覚悟していた。毎日の緊張が、目の下の肉を削ぎとってしまつた。かれがひきいる軍艦ディアナ号と運送船ゾーチック号が、ともすれば霧が出て視界を乳色にしてしまふ南千島の海域をうろつきはじめたのは、ロシア暦の八月中旬（一八二二年・文化九年）のことである。

霧のほか、風も潮流もすべて操船に都合がわるかつた。

「背信湾（国後島南端の泊湾）に入りたい」

というのがリコルドの目的でありながら、クナシリ島の東方のシコタン（色丹）島が見えるあたりをさまよつていたりしたが、八月二十八日（日本暦八月四日）になつてようやくめざす湾に入ることができた。

海上から見ると、右手（東方）にケラムイ岬がながく淡く、みどり色の一線を南にのばしている。たれでもこの特殊な陸地のかたちが、背信湾であることは識別できた。さらにいえば去年、この湾内に碇泊中に、かれらの前艦長ゴローニン少佐以下が上陸し、詐略でもつてとらえられたのである。リコルドにいわせれば、乗組員の士気は高かつた。たれもが、前艦長以下を救出せず

に祖国に帰ろうとはおもっていなかった。

リコルド少佐は湾内に進入しつつ、望遠鏡をもって泊の町を見た。
(日本は、この湾奥の陣地を強化した)

ということとはすぐわかった。望遠鏡で見たところでは、風景にあらたな構造物が加わっていた。十四門の大砲を二層に構えた砲台である。

泊は、海岸に長大なんだら染めの幔幕をめぐらして、海から町が見えないように工夫されている。幔幕より上に見えるものは、大きな兵營の屋根ばかりであった。日本側の小舟も、すべて渚から上のほうにひきあげられている。

陸地が、戦闘開始の緊張でつつまれていることは、その一事でもわかる。

日本側は発砲もせず、沈黙している。満を持して海上の軍艦を見つめているらしいことが、リコルド少佐にも感じられた。

少佐は、ディアナ号を泊の陸地から二湮(ニ・セキロメートル)のところにもってゆき、投錨した。碇をおろしたということは、すくなくとも戦闘の意志をもつ行為ではない。

「レオンザイモ(良左衛門)」

と称して、ロシア語ができる男がいる。かれは六年前、フヴォストフ大尉のために拉致され、その後ヤクーツクなどに滞留し、ロシア語を理解するようになっていた。リコルドはこの人物を通訳としてつれてきたのだが、諸事、小細工が好きで、ロシア側のたれの目からみても信用できないということもわかっていた。良左衛門は、実際には五郎次といい、番人程度の身分の男だったが、自分では松前城下の商人であると称していた。

リコルドは、陸地へ派遣する使者としては、人格に信用のおけない良左衛門をえらばず、与茂

吉をえらんだ。摂津の御影村（現・神戸市東灘区）の嘉納治兵衛持船観喜丸の水主である。カムチャツカ半島に漂流して七人だけが生きのこったということは、すでにふれた。与茂吉はボートで上陸し、土地のアイヌに案内されて日本側の陣地へ行った。

リコルドは、与茂吉に手紙を託していた。無実なるゴローニンは釈放されるべきである、もしそうでなければ、力にうったえてでも引渡しを要求するであろう、という大意であった。それ以上、ゴローニンその人がはたして生きているのか、というのが、リコルドの気がかりだった。日本側陣地の隊長は、手紙をうけとらなかつた。ただし口頭で、艦長みずからが出むいて来いとのみ言い、与茂吉に対しては、早々にロシア船へ帰れ、とのみ命じた。与茂吉はむなしく帰ってきた。リコルドははなはだしく失望した。

良左衛門にすれば、フヴォストフ大尉に拉致されて六年もロシアにとどめられていた。このことでかれが、ロシアとロシア人をどう思っていたか、想像がつく。

かれは、ロシア人の約束や人道感覚を信じるよりも、かれらの弱点を読み、その裏を搔くほうがはるかに自分のためになると思ひこんでいた。

リコルド少佐は、この言葉に一貫性がなく、猜疑ぶかくもある日本人をもてあましていたが、一面、この日本人の狡猾さは抑留という不幸な境涯にあるためだと思つて、かすかな同情もしていた。リコルドは、そういう男だった。

リコルドは、使者として与茂吉が失敗した以上、談判をもつて交渉しなければ当方の意が通じにくい。それには、ロシア語と日本語ができる艦内唯一の人物である良左衛門を交渉役として上陸させるほかなかつた。

(しかし、良左衛門は、帰艦しないだろう)

と、おもった。この場合、ただ一人の通訳をうしなうことは、この困難な搜索航海において耳と口をふさがれたようなことになってしまう。

リコルドは、かれを上陸させる気はなかった。となれば、陸地との交渉ができず、搜索も不可能になる。この指揮官の思案がさまざまに輪をえがいて循環するうちに、べつな思案の場に大きくとびこんだ。

(この海峡を航海する日本船を拿捕することだ)

ということであった。他民族をごく簡単に捕えるというこの海域でのロシア人の行動は、一つの文化になってしまっているのだろうか。リコルド少佐といえどもフヴォストフ大尉とおなじ文化を共有するはめにならざるをえなかった。

ただし、リコルドにはこの文化としての自分の行為について多少ためらったかにみえるが、しかし、目的のためには手段をえらばないという軍人らしい単純さでそれを正当化した。

ついでながら、ゴローニンの『日本幽囚記』には、リコルドの「手記」も添えられている。「手記」(井上満訳)によると、

私としては、この海峡を通過する一日日本船に不意に本艦を乗りつけ、武器を使用せずにその中の主な日本人を捕えても、何らわが方の対日平和意向にもとらないのみか、可能にして正当な行動だと思う。そしてその日本人からロシア人捕虜の身の上について正確な情報を得れば、私自身も、士官たちも、全乗組員もこの重苦しい徒労の状態を脱し、何ら成功の見込みもない国後島への再度の来航の必要がなくなるのである。

と書いています。

たしかに、「重苦しい徒労の状態」にあるリコルド少佐の主観的状況は同情されていい。ただ他国の平和なぐらしのなかにある人間をつかまえるという行為が人間としていかに異常なものであるかについては、リコルドの文章はふれていない。つかまえる理由は「通訳の良左衛門を上陸させたくないから」というだけのことである。

ただ、この時期、日本暦においても八月に入っている。八月のこの海域は危険で、日本船はもはや影をひそめているのである。リコルドは、ともすれば荒れがちなこの湾内で、けものみちに待ちうける獵師のように三日間待った。

当時のクナシリ島泊の運上所の指揮官は、幕臣太田彦助である。

かれは、剛愎^{ごうへつ}な上に、事務処理にも機敏な能力をもっていた。ロシア艦の湾内侵入という事態について逐一^{いちいち}松前奉行荒尾但馬守^{あらいだまのり}に急報していた。奉行の荒尾も緊張し、江戸の老中あて、事態の変わるごとに船便を差したてている。

奉行の荒尾が江戸へ送った書状をみると、日本暦八月三日、異船見ゆというくだりは、直訳すれば以下のようなものである。

「当月三日、クナシリ島のうちケラムイ岬の後方のほうに、異国船が相見え^{あひみ}ました旨^{むね}、太田彦助より申し越しがありましたので、お届けにおよびます。ただしまだ魯西亞^{ロシア}ということがはつきりしませんので、この書状では国名を申しあげません。様子がわかりしだい、追々^{おおいおい}申しあげます」

と、まことに要領^{ようりやう}ぶかい文面といえる。すぐさまロシア船であると即断しないあたりにも、緊迫した空気が察せられるといえまいか。

かれらは、満を持している。その臨戦的闘志は尋常なものではなく、太田彦助から松前駐在の高橋三平（松前奉行所詰吟味役^{つづみあやみやく}）あての書状によると、

「当方人数（幕府直属の士卒）、南部家（南部藩兵）ともども氣張強^{きばり}く」

とある。フヴォストフ襲撃によっておこったシャナ（紗那）事件では警備隊はまことにぶざまであった。このことで奥羽一田から江戸まで非難があつたために、その恥を雪^{すす}ぐべくこんどそは全滅を賭^として勇戦敢闘しようとする覚悟している。北陲^{きたし}の孤島の弱小な守備隊としては悲愴なことがあつたといつていい。

一方、リコルド少佐の側の緊張もすさまじかつた。全艦、臨戦態勢をとり、火炮にはすべて砲弾をこめ、口薬^{くやく}を差しこみ、砲手はつねに砲側にあり、また見張の者をつねに二十人ほど位置につかせ、陸上のささいな変化も見おとすことなく望見させていた。

（日本の船がやってこないか）

と、リコルドは拿捕を決心して以来、ともかくも三日間待った。

ついに、日本船が来なかつたために、かれは、かれにとつて好ましからざる通訳である良左衛門を上陸させることに決心した。この間、リコルドはわざと良左衛門に「お前たちをつれてカムチャツカへ帰航する」などとかれが落胆するようなことを言い、その心底をためしたりした。良左衛門はカムチャツカへもどるときいて、顔色を変え、やけくそになつたように、さまざま矛盾したことを口走った。

結局、リコルドは良左衛門を上陸させた。

ただし、用心のために、与茂吉のあとに日本側に使いた忠五郎という漂流民をつけた。

リコルドにとってゴローニンが生きているかどうかということが、最重要の関心事だった。生きているとすればどこにいるか。

それらの質問条項を一問ずつ三枚のカードに認め^{した}ててやった。第一枚目には「ゴローニン艦長以下はクナシリ島にいる」、第二枚目には「ゴローニン艦長以下は松前、長崎、江戸に護送された」、第三枚目は「ゴローニン艦長以下は殺された」というものであった。日本側としては、そのうちの一枚をとりあげるだけでロシアへの返事になる。

九月四日（日本暦八月十一日）のことである。翌日、良左衛門だけがもどってきた。忠五郎は逃げたのである。

良左衛門は、おそるべき報告をもたらした。

「ゴローニン艦長以下全員が殺されたよ」

「ほんとうか」

リコルドは、青ざめてしまった。

「うそじゃない。殺されたんだ」

良左衛門は、ふてくされたように、いった。

これは、良左衛門の作り話ではなかった。

責任者の太田彦助が、松前の上司高橋三平に送った書状（八月十四日付）にも、

「このさわぎが、松前までひろがるのはよろしからず、すべて当所かぎりに食いとめてしまいたく、そのため、昨年召捕^{めと}った七人（註・通訳のクリル人は含めていない）の者は、米盗みの不法によつて残らず当所において殺害した、と申しきかせました」

とある。国際問題というものの複雑さを知らない太田彦助の独断というべきものであった。彦助にすればロシア艦の者が激昂して上陸してくれば残らず討ちとるつもりでもあったらしい。

——ゴローニン少佐以下七人はすでに殺されてしまっている。

という良左衛門がもたらした報は、リコルド艦長以下を悲歎につきおとした。

「悪人ども。——」

と、リコルドは陸地の日本人たちについてはげしく表現している。かれは、このときの自分の感情を「わが友の血を流した陸島を誰しも平気で見られなくなった」とのべているが、すでにかれにとって日本人は憎むべき敵になった。

すぐさま砲門をひらいて、戦鬪を開始すべきであった。

もつとも、官吏として慎重なところがあつたかれは、こういう場合、どういう処置をとるべきかということについて上司の指示をうけていないことを気にした。

ただ、この事態になった以上、

（本国政府もまた日本側のこのような悪虐行為を看過^{みす}ごしにしないだろう）

と考えた。この判断によって、遠征軍の司令官にときに許される独断専行の処置をとつてもよいであろうとおもった。つまりは、陸地の日本人の村々を攻撃するということである。

その決心をする前に、リコルドはさらに念を入れることにした。

「ゴローニン少佐以下七人を殺した」

という書面を日本人の長官からとりつけておくことである。あとで本国政府がリコルドを裁判にかける場合、無罪を証明する唯一の証拠になるだろう。